

知的障害特別支援学校中学部における職業教育の充実のあり方に関する研究

名古屋恒彦*・稲邊宣彦**・田村英子**・田淵 健**

(2008年3月3日受理)

Tsunehiko NAGOYA, Norihiko INABE, Eiko TAMURA and Ken TABUCHI

A Study of a Career Education at Lower Secondary Departments of Special-needs Schools for Children with Intellectual Disabilities

1 問題と目的

近年、障害のある人たちへの就労支援施策の進展が著しい。2002年に示された「障害者基本計画」において、「雇用・就業は、障害者の自立・社会参加のための重要な柱であり、障害者が能力を最大限発揮し、働くことによって社会に貢献できるよう、その特性を踏まえた条件の整備を図る」とする方針が示され、施策の具体化が方向付けられた。2005年に成立した障害者自立支援法においても「就労移行支援」「就労継続支援」といった様々な形態での就労支援が重要な位置を占めている。

この動向に対し、知的障害特別支援学校卒業者の一般就労率は低迷している。知的障害特別支援学校高等部（本科）卒業者の一般就労率は、1980年の段階で57.9%であったが、2005年では、23.2%にとどまっている。中学部卒業者の一般就労率について見れば、1980年では6.4%であったが、2007年では0.1%である（日本精神薄弱者福祉連盟、1981；日本発達障害者福祉連盟、2006）。

職業教育の充実喫緊の課題である。職業教育に関しては主に高等部段階の課題として研究・検討されることが多い（高畑・武蔵、2002；全日本特別支援教育研究連盟、2004；泉、2005；阿部・石畑・滝田・山本、2006；森脇、2006）。

ところで、知的障害教育における職業教育の中核をなす指導の形態として作業学習がある。作業学習は、「作業活動を学習活動の中心にすえ総合的に学習するものであり、児童生徒の働く意欲を培い、将来の職業生活や社会自立を目指し、生活する力を高めることを意図する」（文部省、2000）とされる。

作業学習は多くの場合、中学段階から実施されており、より適確に就労を支援する職業教育を行うためには、中学段階での職業教育の実践研究が不可欠である（中西、2006；早川、2006）。

中学部における作業学習に関して、岩手大学教育学部附属特別支援学校（以下、「附属特別支援学校」）では、中学部設置時より作業学習を精力的に研究してきている。しかし、作業学習の背景となる生産社会の状況変化に即し、かつ持続可能で発展性のある新たな作業学習の検討が、2006年度における緊急課題とされていた。すなわち、同校中学部の作業学習において実施されていたリサイクル作業（空き缶の選別及びつぶしを主たる作業内容とする）が、元請け会社の業態の変更に伴い有用な作業とはなりにくくなってきたことが課題とされ、新作業種の開発が検討の俎上に載せられたのである。

そこで、本研究では、上記附属特別支援学校に

* 岩手大学教育学部特別支援教育科

** 岩手大学教育学部附属特別支援学校

における課題解決のための実践研究と連動し、知的障害特別支援学校における職業教育のあり方を附属特別支援学校中学部における作業学習および働く活動を大きく位置づけた生活単元学習の授業研究を通して検討する。その上で、今日的なニーズに即応した中学部職業教育のあり方を附属特別支援学校中学部における新作業種構想として提言する。

2 方法

本研究では、以下の三つの活動を実施する。

(1) 本研究著者4人（以下「担当者」）による検討会の実施

ここでは、以下を検討する。

- ・ 目指すべき作業学習の教育目標の確認。
- ・ これまでのリサイクル作業の総括。
- ・ 後出(2)にあげる授業研究の協議。
- ・ 後出(3)にあげる実践校視察報告と協議。
- ・ 上記3点を踏まえての新作業種構想。ただし、新作業班決定は附属特別支援学校の専権事項であることを十分踏まえ、本研究では附属特別支援学校への提言という形での構想案作成までを目標とする。

検討会での発言内容を記録として文書化し、担当者間で確認したものを本研究の資料とする。授業研究会の授業検討は、いわゆる研究協議形式で進め、同様に発言内容の文書化、担当者による確認を経て資料とした。

(2) 附属特別支援学校中学部における授業研究

ここでは、附属特別支援学校中学部で実施された生活単元学習のうち、新作業種構想の素材となり得る働く活動を活動内容に有する三つの単元の授業研究（3回）を行う。授業研究の視点は、検討会で確認した教育目標に即して行う。

(3) 他の特別支援学校における中学部作業学習等の視察、資料収集

ここでは、担当者中、名古屋が、継続的に関わりをもつ特別支援学校における中学部作業学習等の視察と資料収集を実施し、担当者間で情報を共

有する。

以上の(1)から(3)までの活動を通して、本研究の目的に即した望ましい作業種のあり方を、以下の五つの点で整理する。

- ① 目指すべき作業学習の目標
- ② リサイクル作業の成果と課題
- ③ リサイクルポット作業の成果と課題
- ④ りんごの菓子作りの成果と課題
- ⑤ 他の実践校資料の検討

それらの検討・整理の後、新作業種構想を行う。

3 結果

(1) 検討会等は以下のように実施した。

① 検討会 ※カッコ内は主な検討内容

- ・ 第1回：2006年8月29日（研究計画検討）。
- ・ 第2回：2006年9月25日（リサイクル作業の総括）。
- ・ 第3回：2006年10月24日（第1回授業研究会の協議）。
- ・ 第4回：2006年11月17日（第2回授業研究会の協議）。
- ・ 第5回：2006年12月18日（第3回授業研究会の協議）。
- ・ 第6回：2007年1月16日（研究のまとめと新作業種構想）。

② 授業研究会 ※各単元の概要は資料1及び資料2を参照

- ・ 第1回：2006年10月24日（単元「リサイクルポットを作ろう」）。
- ・ 第2回：2006年11月17日（単元「グルメ祭りⅢ『リングで作って売ろう』ーりんごコロッケ・りんごゼリーを作って売ろうー」）。
- ・ 第3回：2006年12月15日（単元『リサイクルポットを作ろう』〈第2期〉）。

③ 他の実践校資料の収集

実地視察実施校：県内1校、県外4校（山形県、千葉県、長野県、熊本県）

※県外学校については、実地視察時に各地域の他校の情報なども収集し、検討における

話題とした。

(2) 検討結果の要約

①目指すべき作業学習の目標

作業学習が本来有する教育目標、附属特別支援学校のこれまでの作業学習の実績、特別支援教育が掲げる「主体的」「自立」「社会参加」という目標論を踏まえ、以下を目指すべき作業学習の目標とした。

- ・現実度があり、生徒主体に取り組める作業活動。

②リサイクル作業の成果と課題

<成果>

- ・課題、活動が明確であり、生徒にとって取り組みやすい活動であった。
- ・分業化の確立や活動量の確保という点で、優れており、仕事が流れていた。
- ・繰り返しの活動が、見通しの持ちやすい状況をつくっていた。
- ・分業化の中で、障害の重い生徒にも取り組める活動が確保されていた。
- ・缶つぶしの課題はあるもののプルタブ分別は有用な活動であった。
- ・洗浄作業で、生徒が自分から、缶内のゴミ(たばこなど)を処理する工夫をし始めるなど、活動の発展も見られた。
- ・作業班発足当初は、地域での資源回収・分別が主であり、地域に密着した活動が展開できていた。
- ・空き缶を地域に回収に行く作業を活動としたことで、缶の量が確保された、作業活動がつぶし以外に広がった、などの成果があった。
- ・空き缶回収かごを常設したことで、作業のない時期にも、生徒にとって、作業への意識が持続できた。

<課題>

- ・主たる作業である缶をつぶすことが実際のリサイクル活動として意味がなくなってきた。引取業者はつぶさない方がよいとのこと。
- ・当初は地域での資源回収が主であり、つぶす活動は付随的であったが、つぶす活動が主と

なり、資源回収等の活動が希薄化した。

- ・活動による収入等、実際の労働活動としての見通しが持ちにくい。
- ・単元「附養祭」等での自主販売活動に制約が大きい。
- ・作業展開にあたり、準備された缶をただつぶすだけ、という展開になりがちになることもあった。そのため目標も、授業時間内で「何個つぶす」ということだけになりがちだった。
- ・比較的障害の重い生徒にとって、社会とのつながりを意識しにくい難しさがあった。

③リサイクルポット作業の成果と課題

<成果>

- ・材料となる古紙が十分にあることから、生徒の活動量が確保できた。
- ・分業化が図れ、支援の個別化ができた。
- ・一定の活動を繰り返せる工程が用意でき、活動の見通し・習熟につながった。

<課題>

- ・製品の完成には長時間の乾燥が必要であった。
- ・製品の実用性の面では、外観や当初の実用面の特性とされた部分の実際上の困難(ポットごと土中に還元できるとのことだったが実際は極めて困難)などの課題が見出された。
- ・単元での販売活動や同種の作業を先行して行っている施設の状況から、販路が期待できにくいことが予想された。

④リンゴの菓子作りの成果と課題

<成果>

- ・地域に根ざした素材を活用することができた。
- ・分業化が図れ、支援の個別化ができた。
- ・一定の活動を繰り返せる工程が用意でき、活動の見通し・習熟につながった。
- ・食品づくりには生徒の期待感が大きかった。
- ・販売活動を地域で展開でき、単元活動としての広がりが見られた。

<課題>

- ・食品製造を主とした作業を構想する場合、機材の限界、設備の限界があった。
- ・衛生面での課題を解消することや、販売をす

る上で保健所の基準を満たすことは困難である。今後、さらに可能性を模索する余地はあるが、現状では困難と判断された。

- ・販売を目指す上での、品質の保持、確実性の確保は難しかった。
- ・販売できたとして、販路確保は難しいと予想された。

⑤他の実践校資料の検討

- ・材料入手等で工夫が見られる作業班があった。
- ・大量生産体制がとられていた。
- ・作業種開発を行ったある学校では、他校の作っていないものを追究する姿勢を打ち出しているものもあり、姿勢として参考となった。

4 考察～望ましい作業種の構想に向けて～

(1) 望ましい作業種のあり方

本研究では、中学部作業学習における望ましい作業種の検討を行ってきた。

これまでの空き缶リサイクルを含む三つの作業活動の授業研究を中心に検討した。その結果を踏まえ、今後構想されるべき新作業種のあり方として、以下があげられよう。

①地域に根ざし、地域と連携できる作業種

地域との連携は、空き缶リサイクル作業でも指向されていた側面であり、またリンゴの菓子作りにおいて、材料を近隣のリンゴ栽培農家から入手することなどからも成果が認められたものである。地域産業と密着した作業学習の展開は、より实际的で、社会生活に直結する作業を実現する。

②質の良い製品作り

販売を目的とした作業学習を展開する場合、作業製品の品質は重要な要素である。リサイクルポット作業ではこの点での課題が非常に大きかった。リンゴの菓子作りでも、衛生面の問題が品質と大きくかわる課題であった。これらの課題が、逆に品質を重視した作業種の必要性を再認識することにつながった。

③販路の確保

作業学習の製品を販売する上での前提である。リサイクルポット作業ではこの部分の課題も看過できないものであった。リンゴの菓子作りでは、保健所との関係で現状では市場販売が不可能である。作業学習を実際的に展開していく上では、本研究検討結果の範囲内では、有用性が高くかつ非食品であることが求められるであろう。

④十分な活動量

作業学習を実際的に進める上では、時間内めいっぱい取り組めることが重要である。空き缶リサイクル作業、リサイクルポット作業では、材料が十分に確保できる状況下で、活動量が確保された。特にリサイクルポット作業では、古紙は膨大に入手可能であった。

⑤分業体制

空き缶リサイクル作業から、この成果は確認されており、リサイクルポット作業、リンゴの菓子作りのいずれでもこの成果は認められた。生徒が自分の得意な活動に取り組めることが成果につながったものと考えられる。生徒に合わせた工程の分担を可能にする製品種が求められる。

⑥活動の繰り返し

これも、前記⑤と同じく、空き缶リサイクル作業、リサイクルポット作業、リンゴの菓子作りのいずれでも認められた成果である。繰り返し取り組むことで、見通しのもちやすい活動が実現すること、活動に習熟が図られることが期待できる。

(2)新作業種構想案

前節にあげた望ましい新作業種のあり方をふまえ、担当者間で「ネイチャークラフト班」(仮称)を構想例としてあげた。

これは、本研究での授業研究での生徒の様子や附属特別支援学校の立地する産業基盤(リンゴ栽培)を踏まえて構想したものである。

「ネイチャークラフト班」には、以下の特徴や課題があげられる。

①枝材を用いた「ペン立て」「ウエルカムチェ

アー」「タバストリー」などの製品が考えられる。この種の製品は岩手県内の土産物店などでもしばしば目にするため、オリジナリティを出すことが求められるが、土地の産業としての馴染み性が高い。

- ②地域産業と結びついた資源であるリンゴの剪定枝の活用が可能である。他の材も学校近隣の山林で入手可能の見込みがある。本年度の中学部実践研究で関係の一層深まった近隣リンゴ農家との連携が可能である。
- ③本研究で収集した実践校資料や県内他校の動向を見ても、他に例のないオリジナリティの高い作業学習が期待できる。
- ④材料は十分確保できる見込みがあり、十分な活動量が期待できる。製品によって、工程の多様化、くり返しの活動が用意できそうである。
- ⑤不定形材の加工を可能にする補助具等の開発に大きな課題がある。

(3) まとめ～知的障害特別支援学校における望ましい職業教育に直結する作業学習

本研究では、知的障害特別支援学校における望ましい職業教育のあり方を、自立を実現する作業学習あるいは生活単元学習の授業実践の検討を通し、現実度が高く生徒主体に取り組める授業実践を追究した。

現実度という点では、作業活動が本格的なものであることが普遍的な視点となろう。

その一方で、それぞれの実践が独自性を主張できる現実度ある授業実践の視点として、学校が立地する、あるいは生徒が居住する地域での産業基盤との関係重視も十分に考慮されることが必要である。これは、作業学習や生活単元学習での働く活動が地域産業と関係深いことが有効である場合があることを意味する。もとより、作業学習にしても、生活単元学習にしても、そこでの働く活動が直ちに生徒の将来の進路先の業種に直結するわけではない。しかし、地域の産業基盤を踏まえることで、材料の入手、作業技術のノウハウ、販路の開拓、土地柄を生かしたオリジナル製品などで

大きな益が期待できる。さらに、地域に根ざした作業活動は生徒にも教師も馴染みがあり、より意欲的な取り組みにつながる。

地域の産業基盤と密接に結びついた現実度の追究にあたっては、附属特別支援学校が30年にわたって築いてきた地域とのつながりが実践上大きな意義を有していた。特別支援学校がそれぞれに地域と結びついていくことが、より現実度の高い授業実践には必要となろう。

生徒の活動の主体性については、本研究における授業研究で、実際の授業計画から場の設定、道具等の工夫、教師の共に活動しながらの支援と様々な場面での支援的対応によって、実現できることが示唆された。このことは、角度を変えて考えるならば、教師による様々な支援的対応によっても生徒の活動の主体性が確保できない場合は、作業学習であれ、生活単元学習であれ、望ましいものとは判断できないということでもある。

以上、現実度と主体性の確保を追究しながら、中学部であっても実社会に連なる青年期にある以上、職業教育を日々の授業実践として展開していくことが望ましいと考える。

なお本研究では、研究の目的について概念的な検討に終わることのないよう、具体的な新作業種構想の提言という形で示した。この提言は、2007年度において、附属特別支援学校中学部における新作業班「クラフト班」発足に結実している。「クラフト班」は、本研究で構想した「ネイチャークラフト班」と名称が異なるが、作業内容は「ネイチャークラフト班」構想に即したものである。今後は、実施段階に至った新作業種が、真に現実度高く、生徒主体に取り組める作業学習として成果を上げ、ひいては中学部段階での職業教育に資するものたり得るかの検証が求められよう。

注)

- ・本研究に関わる実践実施時点では、岩手大学教育学部附属特別支援学校は「岩手大学教育学部附属養護学校」であったが、本論文では同校名にある「養護学校」を「特別支援学校」で統一表記した。
- ・本研究は平成18年度学長裁量経費萌芽的教育研究支援経費

によって行われた。

文献

- 阿部隆一・石畑健一・滝田恵子・山本宏之（2006）：就労に向けた取り組み。特別支援教育研究，No591，pp. 14-17.
- 泉裕志（2005）：進路学習二〇〇五年前期現場実習レポート—こころいっぱい。実践障害児教育，Vol.388，pp. 9-17.
- 早川浩司（2006）：小中合同栽培から、働く意欲と地域交流へ。特別支援教育研究，No591，pp. 10-13.
- 文部省（2000）：盲学校、聾学校及び養護学校学習指導要領（平成11年3月）解説—各教科、道徳及び特別活動編—。東洋館出版社，pp. 375-376.
- 森脇勤（2006）：企業と共に人材を育てる新たな進路指導システムをめざして—デュアルシステムの取り組み—。特別支援教育研究，No591，pp. 18-21.
- 中西郁（2006）：今後の就労支援で求められるもの。特別支援教育研究，No591，pp. 2-5.
- 日本発達障害者福祉連盟（2006）：発達障害白書—2007年版—。日本文化科学社，p. 181.
- 日本精神薄弱者福祉連盟（1981）：精神薄弱者問題白書—1981年版—。日本文化科学社，p. 248.
- 高畑庄蔵・武蔵博文（2002）：支援ツールを活用した現場実習における就労指導プログラムの効果と長期的維持。特殊教育研究，第39巻5号，pp. 47-57.
- 全日本特別支援教育研究連盟（2004）：夢ある進路を訪ねて—新しい職域開拓の可能性。発達の遅れと教育，No568，pp. 4-23.

<資料1>

単元「リサイクルポットを作ろう」について

(1) 単元の概要

本単元は、リサイクル班の生徒5人と教員2人で、古紙を再生してつくる植木鉢「リサイクルポット」を製作し、附養祭等で販売しようというものである。

単元を進めるにあたっては、これまでのリサイクル班での空き缶リサイクル作業等での様子（ニーズ）を踏まえ、リサイクルポット製作工程を分業化して取り組む。一人ひとりが力を発揮できる分担活動に取り組むことで、主体的に取り組む作業となることを期待した。

リサイクル班では、これまで空き缶リサイクル作業を展開していた。しかし、その中で主たる活動である空き缶をつぶす工程が、実際に元請け業者に納品した後に行われる大型プレス機での加工段階での作業効率を落としてしまうことが明らかになった。そのため、空き缶つぶしの工程が、実際的な作業としては不相当であると判断し、新しい作業活動を模索した。

このような中で、リサイクルポット製作が検討されたのである。リサイクルポットは、古紙のリサイクルによって植木鉢を製作する作業であり、「リサイクル」という、リサイクル班の作業方針に合致するものであった。さらに、工程の分業化が可能であることから、一人ひとりが力を発揮しやすい作業となると考えられた。

一方で、すでにこの作業を実施していた福祉施設等の状況から、販路開拓に困難があることや成型後の乾燥に時間がかかることなどの課題も指摘されていた。これらの課題も含め、実際に作業を展開することで、生徒主体に展開する中学部作業学習として成立するかを検討することとした。

検討の過程では、岩手大学農場にリサイクルポットを持参して意見を伺ったり、実際に植木鉢として使用してみたりして、実用性という面からの検討も多様な角度から行うこととした。

単元は2期にわたって実施するが、1期で出された課題を2期で解消するという手順もとることとした。具体的には用途の変更（植木鉢だけでなく物入れとして加工すること）などがなされることになった。

(2) リサイクルポット作りについて

リサイクルポットの製作には、以下の三つの工程がある。

- ①シュレッダー：材料となる古紙を手動式のシュレッダーを使って細かく裁断する。

②ミキサー：裁断した古紙と水を混ぜて、ミキサーで攪拌し、パルプ液を作る。さらに、そこから水分を除き、粘土状にしたパルプを取り出す。

③成型：機械ロクロと構造のよく似た専用の機械を使い、パルプを植木鉢型に成型し、乾燥させる。

本單元では、以上の工程を、シュレツダー3人、ミキサー1人、成型1人の生徒で分担して取り組んだ。シュレツダー工程は同一の作業を3人の生徒がそれぞれ行うことになるが、シュレツダーの形状や椅子の位置等、道具・補助具や場の配置の工夫を一人ひとりに行うことで、支援の個別化を図った。教員はシュレツダー工程と成型工程に入り、共に活動しながら支援にあたることとした。

工程の分担や道具・補助具等の工夫にあたっては、これまで生徒たちが取り組んできた作業活動での主体的取り組みを参考にし、新しい仕事であっても、なるべくこれまでの活動の積み重ねを生かせるようにした。

分担の仕事に精いっぱい取り組み、新製品となるリサイクルポットをたくさん製作してほしい。

(3) 単元における目標

①自分の仕事内容を理解し、時間いっぱい作業に取り組んでほしい。

②きれいな形のリサイクルポットを完成させてほしい。

<資料2>

単元「グルメ祭りⅢ『リングで作って売ろう』ーりんごコロッケ・りんごゼリーを作って売ろうー」について

(1) 単元の概要

本単元は、中学部の全生徒16人で取り組んだものである。本年度すでに2期にわたって単元「グルメ祭り」を実施しており、その成

果を踏まえての第3期の実践である。

単元を進めるにあたっては、それぞれの生徒の様子（ニーズ）及び製作工程の特徴を踏まえ、三つのグループに分かれて活動に取り組んだ。本研究の事例授業としては、単元活動のうち、1年男子2人、2年男子1人・女子1人、3年男子1人の計5人の生徒と3人の教員で取り組んだ「りんごコロッケ」「りんごゼリー」の製作にかかわるグループの部分である。

いずれのグループの生徒も、これまでの「グルメ祭り」で様々な食品作りに取り組む中で、製作場面においても、祭りへの取り組みにおいても、見通しをもって、より主体的に取り組めるようになってきている。

生徒たちは、「グルメ祭り」以外の単元等でも、働くことに精力的に取り組んでいる。学校近隣のA農園のご協力を得たりんご園の草取り作業などにも、力を合わせ取り組んできた。

そこで、本単元では、地域産業に根ざし、生徒にとっても馴染みのある「りんご」をメイン食材とし、よりテーマを明確にもって、主体的・意欲的に取り組める「グルメ祭り」を目指した。この地域での産物を材料として用い、調理をし、地域で販売する活動は本単元だけではなく、今後も根付く題材として期待できると考えた。

なお、本グループの5人の生徒は、オリエンテーションの中で試作したりんご料理を食べてみながら、自分でりんごコロッケかりんごゼリーを作りたいと希望して集まったメンバーである。自分で作りたいという思いのある製品作りであることから、より意欲的な取り組みが期待された。

(2) 調理活動について

生徒たちは、本単元に至るまでのこれまでの様々な調理活動を経て、調理に興味をもち、食材の取り扱いや調理機器の操作、調理段階

の計測や材料の形態の変化、香りなどを楽しみながら、より主体的に取り組むことができる活動であると考えられた。

調理の作業工程は生徒にとっては活動内容をイメージしやすく、見通しをもちやすいものでもある。グループを分けるにあたっては、前述のように好きな食べ物であったり、作ってみたい物を生徒自身が選択したりする場面を設け、意欲的に取り組めることを期待した。また、自分の力を発揮して取り組めるように生徒の得意な活動を活かした作業を各グループごとに用意することに努めた。

分業作業で取り組むことで、どの生徒にも適切な作業工程を分担し、道具・補助具等を有効に活用して、できる状況を作りながら取り組むようにした。

保護者にも「アップル通信」と称し、3つのグループの活動を伝える配布物を配ることとした。調理に関しては関心をもたれる保護者も多いことから、試作品を持ち帰り、調理へ対するワンポイントアドバイスや励ましのことばなど、毎日の活動へ対する保護者の想いが直接、単元期間に生徒に伝わる方法も取り入れて進めていきたい。

できあがった製品は、ワゴンに積んで、地域の方々に販売に行く。販売の過程で、地域の方々ともお付き合いを深め、「グルメ祭り」の満足感・成就感を分かち合いたい。

(3) 単元における目標

- ①一人一人が自分の役割において主体的に力を発揮し、協力し合いながら調理活動に取り組む。
- ②販売活動に意欲的に取り組み、自分たちの作った物が売れることで喜びを味わう。
- ③地域をテーマとし、購入・調理・販売の学習の中で社会生活力を育む。